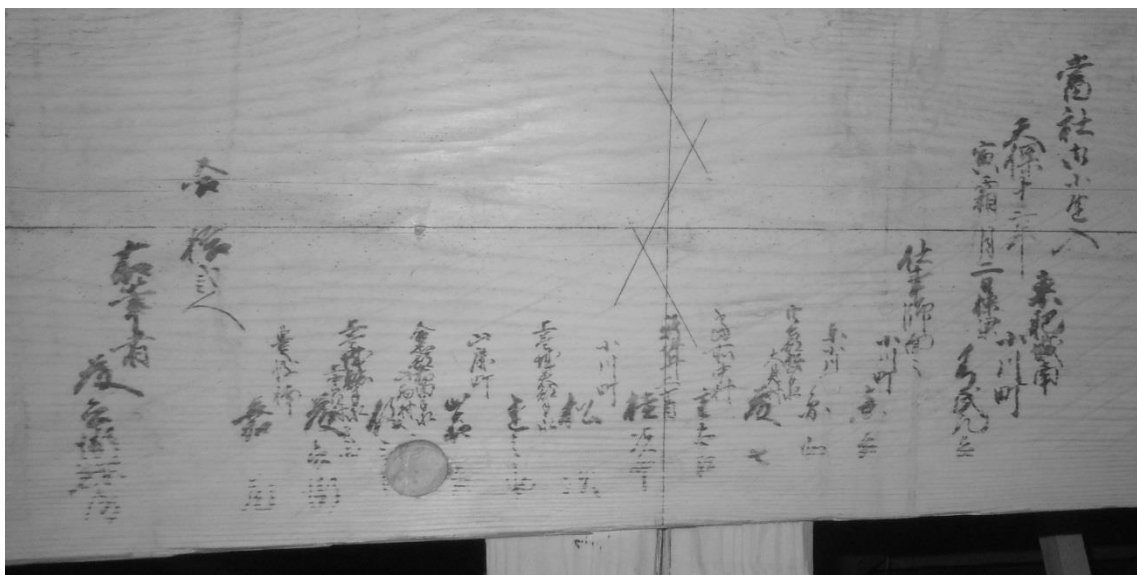


修理工事こぼれ話⑮ 神殿・楼門造営に関わった職人さん

以前のコラムで、神殿と楼門に関わった大工さんについて紹介した回がありました。そのコラムでは、部材に残された墨書から大工さんの名前や出身地などが判明したことを紹介していますが、このような墨書は他にも見つかっています。三の神殿からは、大工さんの名前が書かれた墨書が、以前行われた調査から明らかとなっていました*。また、今回の工事により、山師（やまし）と呼ばれる造営用の原木を調達したと思われる方々の名前が書かれた銘板が、楼門から発見されました。今回はそれらの墨書と、神殿・楼門造営に関わった職人さんについてまとめて紹介します。

1. 三の神殿の墨書



三の神殿 中引梁 墨書

合 拾式人 右筆者 藤兵衛□□	豊後楠 嘉蔵	上益城鯨手永 藤兵衛	上中間村高田 儀三郎	合志郡布田手永 山西村	山鹿町 岩吉	上益城矢部手永 連之助	小川町 松次	新坪井二丁目 桂次郎	當所中村 重太郎	宇土郡松山手永 藤七	大見村 圓助	東小川 寅吉	仕事師面々 小川町 水民元吉	當社御小屋入 天保十三年 寅霜月二日棟梁 東肥城南 小川町
--------------------------	-----------	---------------	---------------	----------------	-----------	----------------	-----------	---------------	-------------	---------------	-----------	-----------	----------------------	---

この大工さんの名前が書かれた墨書は、三の神殿の屋根裏の梁に書かれたもので、今回の工事以前に発見されていたものです*。ここに書かれた大工さんのうち、棟梁水民元吉、圓助、藤七、重太郎、松次の5名は楼門の墨書でも名前が見受けられます（楼門には松次郎と書かれていますが出身地が同じため松次と同一人物とみなしています）。嘉蔵は豊後楠出身となっており楠は玖珠のことと思われるのですが、玖珠は熊本藩領ではないため、どういう経緯で阿蘇神社造営に関わったのか気になるところです。

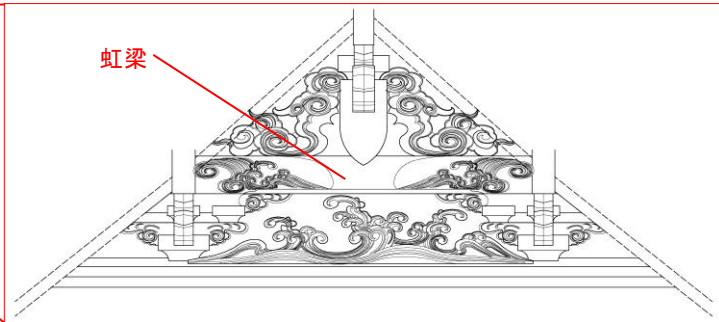
2. 楼門の墨書

楼門からは、山師の名前が書かれた墨書が発見されました。

楼門の2階屋根には、妻飾（つまかざり）という部分があります。その中央くらいの高さに虹梁（こうりょう）という部材がありますが、北面妻飾虹梁の裏面に木製の銘板が釘止めされていました。



楼門 北面



楼門 妻飾姿図



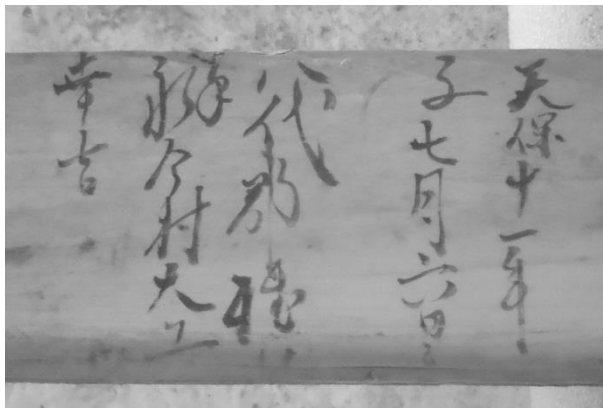
楼門 妻飾虹梁 裏面 山師の銘板

以上									鶴崎関手永 大在北村	阿蘇宮楼門御棟上嘉永二年 閏四月五日執行山師名付
		鶴村	高田手永志村	右同濱村	右同馬場村					
金岩文房	□御新伊辰□貞□	次勘文仁貞□光角梅和佐□吉宇幸	次左衛門吉吉	次左衛門	次左衛門	八	八	八	吉五郎	幸市吉
八吉吉吉	(儀?) 五	(善か吉) 次							(峯?) 吉	
			山川□八茂源小政	□(勝?) 次	□(町?) 次	八重吉助	源兵衛市		和□喜□十 宗(弥?) 吉	和□喜□十 宗(弥?) 吉

ここに書かれた山師たちの出身地は、豊後国の熊本藩領です。熊本藩のお殿様は、豊後街道を通り鶴崎から船に乗るというルートで参勤交代をしていましたが、豊後街道の宿場町とその周辺は熊本藩の飛び地となっていました。この墨書の山師たちはその飛び地のうち鶴崎周辺の方々でした。

3. 大工、山師の出身地

これまでのコラムも含めて、たくさんの大工さん・山師の名前が登場しました。現在の社殿造営時である江戸時代の天保・弘化・嘉永年間に絞り、神殿・楼門の造営に関わった大工さん・山師の出身地をまとめてみようと思います。なお、今まで紹介した大工さんの名前が書かれた墨書にはこれらのものがありました。



一の神殿 付敷居 墨書

天保十一年
 子七月六日
 八代郡種山
 手永今村大工
 幸吉



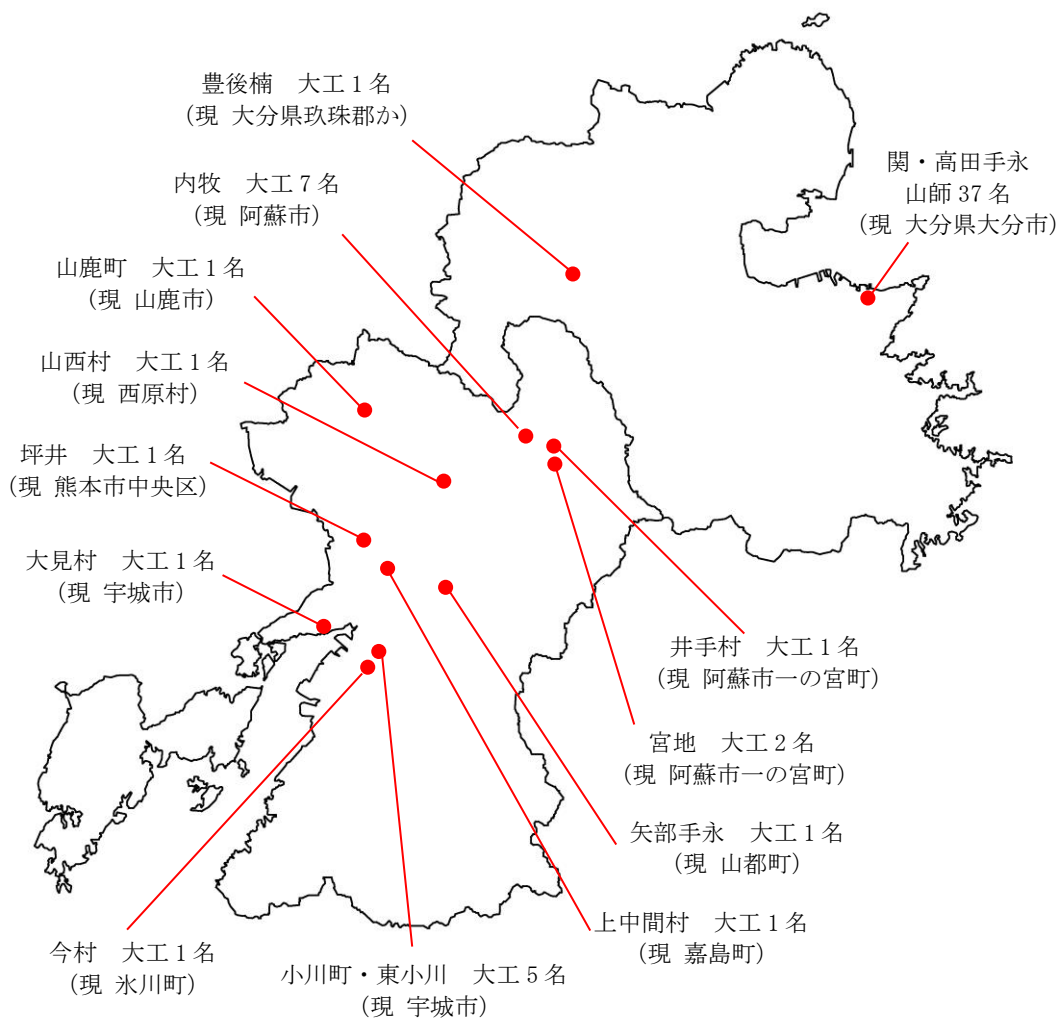
楼門 懸魚 墨書の一部

内牧	小川	同	同	同	同	同	内牧	小川	宮地	小川	宮地	松山手永	手附大工
廣蔵	圓助	富八	久四郎	又市	壽太郎	藤四郎	常太	三平	重太郎	松次郎	兵四郎	藤七	
										井手村			
										壽七			

これらの大工さん・山師の出身地は地図上では下図の位置になります。

熊本藩領は、天草地方や球磨・人吉地方を除く現熊本県一帯と現大分県のごく一部であるため、阿蘇神社造営に関わった大工さん・山師は、熊本藩領全域に渡っているといえます。個人的には、山師は内陸出身の人が多いのではと思っていましたが、比較的海に近い地域の方々ようです。

(なお、同一人物の可能性が高いのに墨書によって名前の文字や出身地が異なる場合がありますが、便宜上同一人物とみなし、名前の文字や出身地は今回のコラムに掲載した墨書のものに統一しています。)



大工・山師 出身地

まとめてみると、大工さんは、棟梁水民元吉と同じ出身地の小川町から来ている大工さんと、阿蘇神社のある現阿蘇市出身の大工さんが大半を占めていることがわかります。また、造営に関わった山師はこの37名以外にもいたのかもしれませんが、銘板が残っているということは、上棟式にはるばる大分から参列しに来たのでしょうか。詳しいことはわかりませんが、この大工さんや山師からみても、阿蘇神社造営は熊本藩が一丸となって行っていたことが垣間見えます。

(石田 陽是)

*『阿蘇市文化財調査報告 第一集 阿蘇市指定有形文化財 阿蘇神社建造物調査報告書 一の神殿・二の神殿・三の神殿・楼門・神幸門・還御門』阿蘇市教育委員会生涯学習課・宗教法人 阿蘇神社、2006